

【研究内容 学級活動（下学年）】

学級の仲間との協働を通して、自己有用感を高める学級活動  
～「たすけあう つよいきずなの 2年2組」～

宮城県仙台市立鶴巻小学校  
教諭 加藤 裕美子

## 1 主題設定の理由

今年度は、2学年の担任になった。4月に会った25名の子供たちから感じた学級の印象は、「楽しみながら物事に取り組もうとするエネルギーがある」ということだった。ささいなことでも、教師や友達に褒められたり認められたりすることが、一人一人の意欲向上や、学級全体の雰囲気の高まりにつながった。

一方で、物事に取り組もうとする意欲は、理解度や興味関心の有無、その時の気分などに左右されてしまうことが多かった。集団の場にそぐわない自由な言動に気付かず、集団の中の一人という意識が薄い印象を受けた。また、学習、運動、生活習慣、指示理解など、学級の中での個人差が大きく、順序立てた指示や、視覚的に分かりやすい手本がないと、課題に取り組むのが難しい児童も目立った。

そこで、本学級では、次の二つのことを重視して学級活動における指導にあたっていきたいと考え、本主題を設定した。一つ目は、友達よさや努力の認め合いを通して、自己有用感を高めていくことである。二つ目は、児童同士の学び合いや助け合いを通して、学級集団への所属意識を深めていくことである。

## 2 実践の概要

### (1) 生活班での活動について

生活班では、週ごとの輪番制で、一人一役リーダーの仕事をした。それぞれの仕事の内容は、低学年でも分かるように、活躍場面を限定した簡単なものにした。また、班の友達に自分から声掛けをしたり、友達の様子に気を配ったりするきっかけになるよう工夫した。



にじいろリーダー：学年目標「にじいろ2年生」に関連させたリーダー。  
班の友達の良い所を探して、帰りの会で発表する仕事。

リーダーの仕事をする中で、同じ班の友達と言葉を交わす機会が必ずあるので、席替え後も、新しいメンバーと仲を深める良いきっかけになっていた。また、場面に応じて、グループの先頭に立って自分の役目を果たす経験ができるので、視野が少しずつ広がり、周囲の友達の様子に気付くことができるようになった。リーダーの仕事以外でも、困っている友達がいると、進んで声掛けや手助けができるようになった。

### (2) 当番活動について

#### <給食に関する仕事>

準備・配膳・片付けの過程で必要な係を細分化し、25人全員に一人一役あてはまるようにした。週ごとの輪番制で、一年間ですべての仕事を体験できるようにした。

仕事の内容についての説明は、年度初めの数週間のみ担任が丁寧に行い、その後は、前週に担当した友達から、仕事の内容を教えてくださいよう声掛けをした。

最初は、担任が教えるより時間が掛かったが、慣れてくると、担

#### 3グループに分けた給食当番表



任がその場にいなくても、新しい仕事がスムーズに進むようになった。また、当番表を見て、自分の仕事や欠席した友達の仕事を確かめる習慣も身に付いた。教え合い、助け合いの姿がたくさん見られた。

### <清掃に関する仕事>

生活班ごとに清掃場所を割り振り、「そうじリーダー」を中心に、清掃と反省会（振り返りの時間）に取り組むことができるよう促した。清掃場所によっては、ほうき、ちりとり、バケツなどの仕事を、自分たちで分担させるようにした。最初は、仲良く分担するための方法について、担任が具体的に教え、アドバイスが必要な班には、「そうじリーダー」に伝えるようにした。児童同士で解決できない場合のみ、担任が直接支援した。

グループで仲良く仕事をするだけでなく、素早く丁寧に仕事をするについても、児童の良い姿をその都度取り上げ、全体の場で積極的に紹介した。清掃の仕事を、素早く丁寧に終わらせるために、互いに声を掛け合ったり、進んで仕事を見付けて行動したりする姿がたくさん見られた。



あえて大まかな  
分担のみ表示

### <日直に関する仕事>

昨年度は日替わりで二人ずつ行っていたものを、今年度は一人で行わせることにした。年度初めは、仕事の内容を少なめに設定し、スムーズに仕事を進めることよりも、自分の仕事に責任を持って最後までやり遂げることを重視した。人前で話すことが苦手な児童には、周りの児童が優しく穏やかに助けるよう促し、担任が手を貸さなくても、朝の会や帰りの会が進むことを目指した。

担任は、手助けをするよりも、日直の児童の頑張りや、周りの児童との助け合いに関しての価値付けを重視することで、担任より先に近くにいる友達を頼るようになった。また、気軽に友達を頼ることができるようになり、間違えても気にしない雰囲気作りにもつながった。

## (3) 係活動について

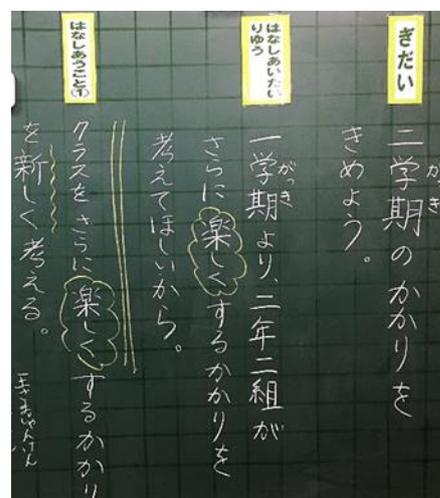
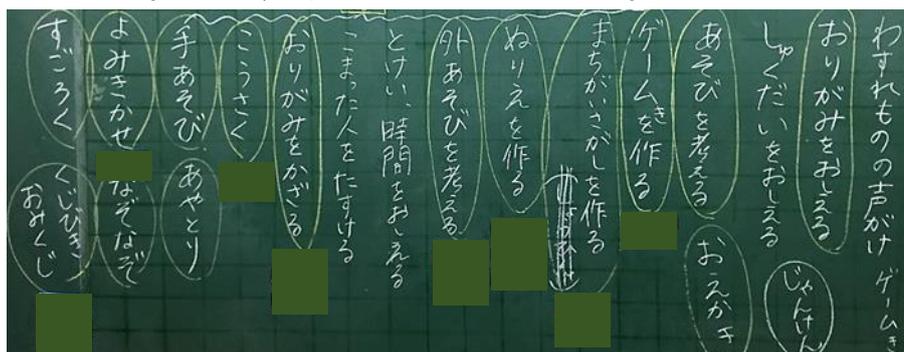
### <一学期>

昨年度にどんな係活動を行っていたかを聞き取ることから始め、昨年度同様に、当番的な仕事を中心に実施した。仕事内容に関しては、児童に考えさせる部分はほとんどなかったが、仕事をするタイミングや曜日ごとの分担については、児童同士で相談させた。

一学期は、仕事内容の創意工夫よりも、自分で選んだ仕事を行うことで、周りの人に感謝されたり、学級の役に立ったりすることの喜びを実感させることを重視した。担任からも、児童同士でも、「ありがとう」の言葉をたくさん言い合うようにした。

### <二学期>

当番活動と係活動の違いを教え、一学期に係活動として行ってきたことは、すべて当番活動に移行し、生活班ごとの仕事として割り振った。そして、新しい係活動を考えさせた。

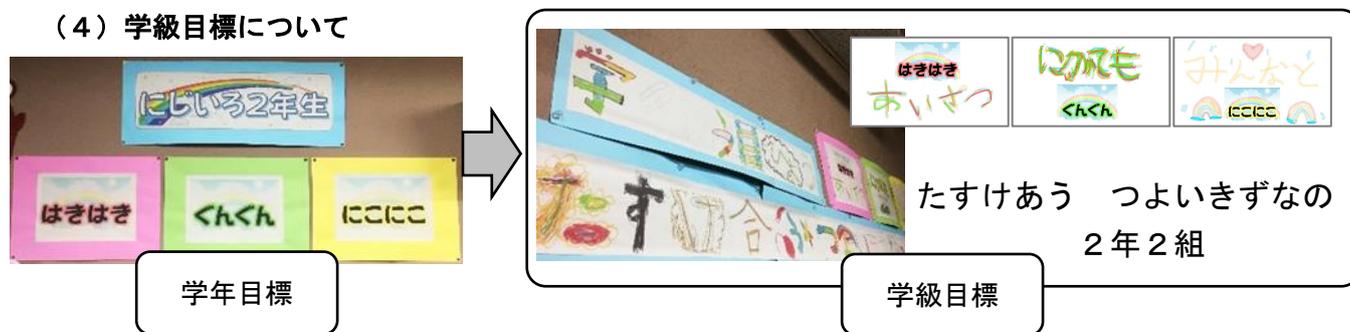


- \* 10月…朝や休み時間、放課後など、隙間時間を活用できず、どの係も活動が開始できなかった。  
担任からは、いつでも相談に乗ることをこまめに声掛けする以上のことは行わなかった。
- \* 11月…最初に相談に来た係の様子や相談内容を、学級全体に紹介し、動き方の手本にさせた。  
動き出す係が増えたので、お知らせ用の掲示板を作り、自由に使えるようにした。
- \* 12月…朝の会や帰りの会で、係からの呼び掛けができる時間がほしいというリクエストが出たので、その場ですぐに、朝の会と帰りの会の内容を変更した。  
呼び掛けをする係が増えてきたので、予約ボードを作った。朝の会と帰りの会それぞれで、「予約は2つ以内」「1分以内」という制限を設けた。  
必要な材料や作品の掲示場所のリクエストなども、その都度、教室環境を整えるようにした。



二学期に、新しい係活動の体制を始めてから、児童は「人の役に立った」「感謝された」という心地良さを実感する機会が増え、活動の意欲を更に向上させている。また、「担任に言われたからやる」ではなく、「友達に喜んでもらえたからやる」という方が、より達成感が得られ、継続性につながっている。

#### (4) 学級目標について



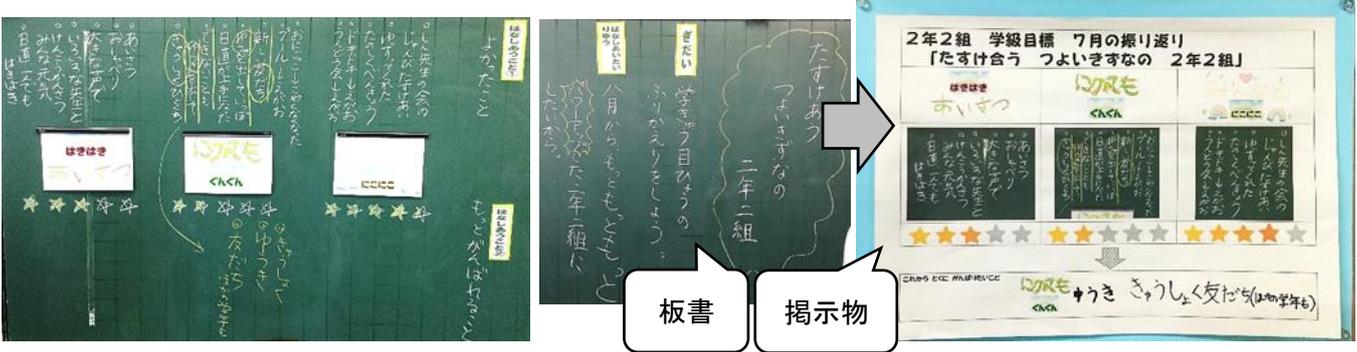
#### <学級目標の作成>

学年目標の合言葉「にじいろ2年生 はきはき・ぐんぐん・にこにこ」をもとに、どんな学級にしていきたいかを尋ねた。たくさん出されたキーワードの中から、特に大事にしたいものを選び、それらを使って、覚えやすいキャッチフレーズを考えさせた。完成したキャッチフレーズ「たすけあう つよいきずなの 2年2組」は、Google jamboardで、一人一文字ずつ手描きしたものを印刷して、教室に掲示した。学年目標と学級目標の合言葉は、教室に掲示するだけでなく、日頃から何度も話題にしたり、様々な行事や学習、生活場面で関連させたりすることで、児童がいつでも唱えることができるよう、意識付けを図った。

#### <学級目標の振り返り>

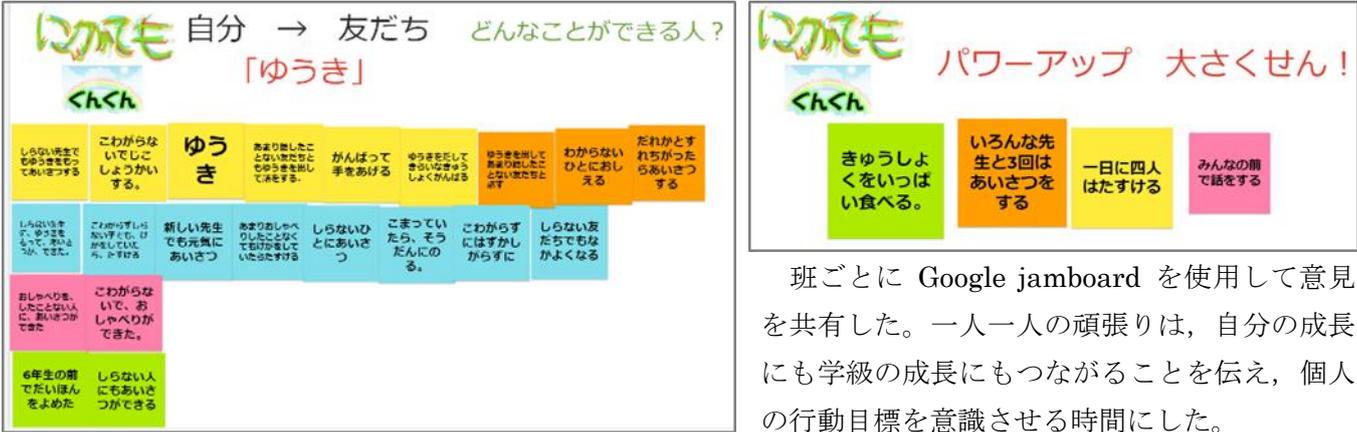
年間で3回（7月、12月、2月）振り返りの時間を設けた。7月は、学年目標の3観点「はきはき・ぐんぐん・にこにこ」それぞれについて、「良かったこと」を中心に話し合った。そして、観点ごとに、

星の数（満点が星5つ）で評価し、最も評価が低かった観点についてのみ、「もっと頑張れること」を考えさせた。出来なかったことよりも出来たことに目を向けさせ、個人や学級の成長を喜び合うことができるよう、前向きな話し合いになるよう努めた。



また、この時間の板書を写真で記録し、学級目標の達成度をいつでも確かめることができるよう、教室に掲示した。掲示物作成は、短時間で作成できることと、簡潔で分かりやすいことを意識した。

10月には、途中経過として、「もっと頑張れること」を具体的に考える時間をとった。7月の振り返りの際に、「もっと頑張れること」のキーワードとして「勇気」「友達」「給食」が挙がっていたので、「勇気」ある行動とはどんなものかを見直し、「パワーアップ大作戦」として行動目標を話し合った。



班ごとに Google jamboard を使用して意見を共有した。一人一人の頑張りは、自分の成長にも学級の成長にもつながることを伝え、個人の行動目標を意識させる時間にした。

### 3 成果と課題

- ◎「担任⇄児童」の関係以上に、「児童⇄児童」の関係を築くことが有効だった。担任が、裏方として「児童⇄児童」の関係作りをコーディネートしていくことで、友達のよさや努力の認め合いの場が多く生まれ、それが自己有用感を高めることにつながった。
- ◎学び合いや助け合いがどのようにうまくいったかを、その都度、担任が価値付けしていくことが有効だった。学年目標や学級目標を軸にして、様々な場面で具体的な価値付けをしていくことで、児童同士の学び合いや助け合いの場が多く生まれ、それが学級集団への所属意識を深めることにつながった。
- △学級の仲間のことを互いに理解できるようになってきたことで、得意分野を互いに認め合う一方、苦手分野に関して、本人の努力を待たずに、励ましたり、手助けをしたり、時には苦手だと決めつけてしまったりすることがあった。それが、偏見につながらないよう、今後も配慮が必要である。
- △一人一人の自主性が高まってきたことで、リーダーシップをとれる児童が増えてきている一方、意見主張する児童や、遠慮して譲る児童が、偏ってしまうことがあった。児童に任せ過ぎず、担任が様子を見守り、指導や支援に入るタイミングを見極めることが必要である。